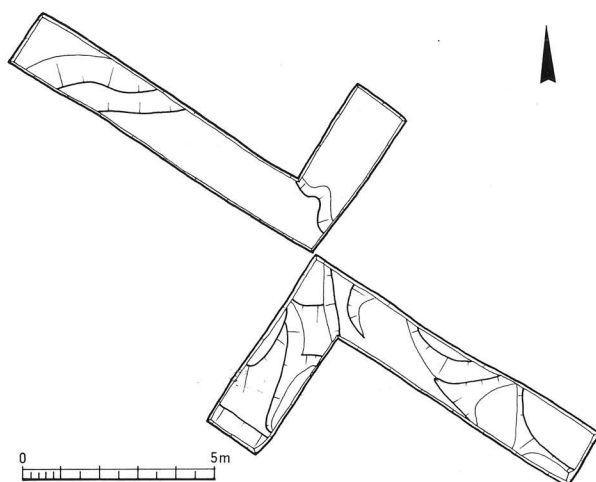


IV-2 第6号地点

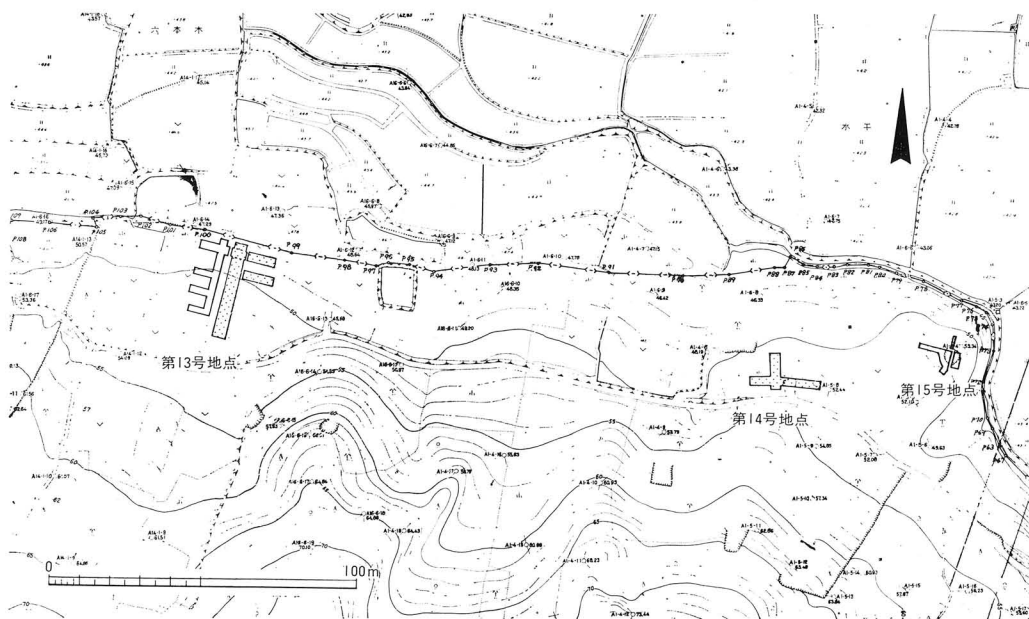
調査地は標高75～80mの西から東へゆるやかに傾斜する尾根筋に位置し、やや高まりがある。従来の分布調査で、土取りによって現れた土層に土師器片と木炭が散布することを確認している。地形の高まりの性格を確認するため、その長軸・短軸方向に直交する幅1.5mのトレンチを設定した。表土下には青灰色粘土の地山が全面にわたって現われ、遺物も出土せず、この高まりは人為的なものではないことが判明した。



第33図 第6号地点遺構図

V 歌姫地区の調査

調査地は奈良山丘陵の東端にあたり、南から北にのびる丘陵の末端部に位置する。第13号地点と第14号地点の2ヶ所を調査し、両地点は西と東に約200mはなれている。第13号地点では、第14号地点の東約60mに位置する第15号地点と共に1972年に調査を行っている。



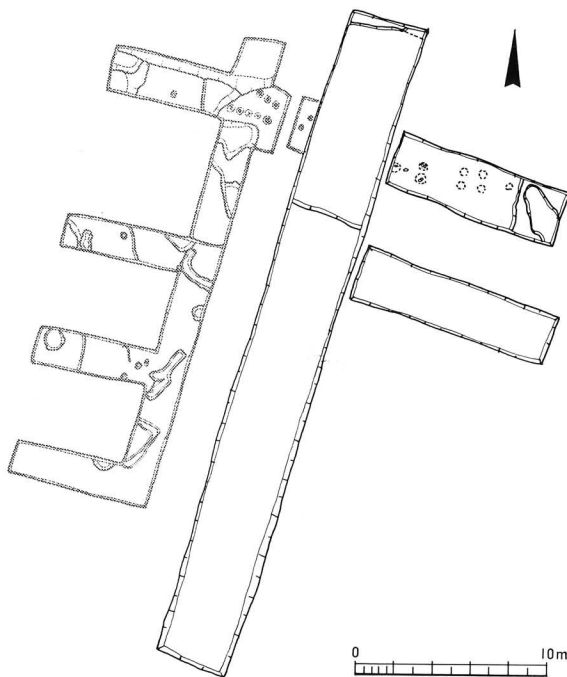
第34図 歌姫地区地形図（網部分：本年度調査区）

V-1 第13号地点

調査地は南から北へ緩く下降する畑地となっている。1972年の調査によって、東西方向に2列に並んでいる円筒埴輪列を検出し、埴輪列と平行して北側に濠状の落ち込みを確認したことから、古墳の存在が判明していた。埴丘はまったく残存していないが、今回の調査は古墳の形状と規模の確認を目的として行い、前回調査地区の東側に旧トレンチと一部重複して幅4mのトレンチを南北方向に一本、東西方向に二本設けた。

南北トレンチは、円筒埴輪列と濠との位置関係からみて埴丘痕跡が埴輪列の南側にあるものとの予測に基づいて設定した。しかし埴輪列の南側2mの位置に段落を検出したが、これより以南はほぼ現在の地形の傾斜に従って漸次高くなり、古墳の基底部積土と認められる痕跡はなかった。また、トレンチ北端部分からは、埴輪列外周をめぐると思われる濠状遺構とされる延長部分を検出したが、表土下の砂層から切り込まれており、表土と同質の黒色土が堆積していることがわかり、埴輪列とは関係ない新しい時期の遺構であることがわかった。

東西トレンチでは埴輪列の延長部分を、二列に8個所において確認したが、後世の攪乱と削平のために遺存度が極めて悪く、すべて破片の集中的な散乱によって位置が確認できたにすぎず、据付け状況をとどめるものはなかった。なお東西トレンチ二本のうち、南側のトレンチでは特に遺構と認められるものはなかったが、地山上面が硬くしまっており、この面からは埴輪片・須恵器片が他トレンチより多く出土した。



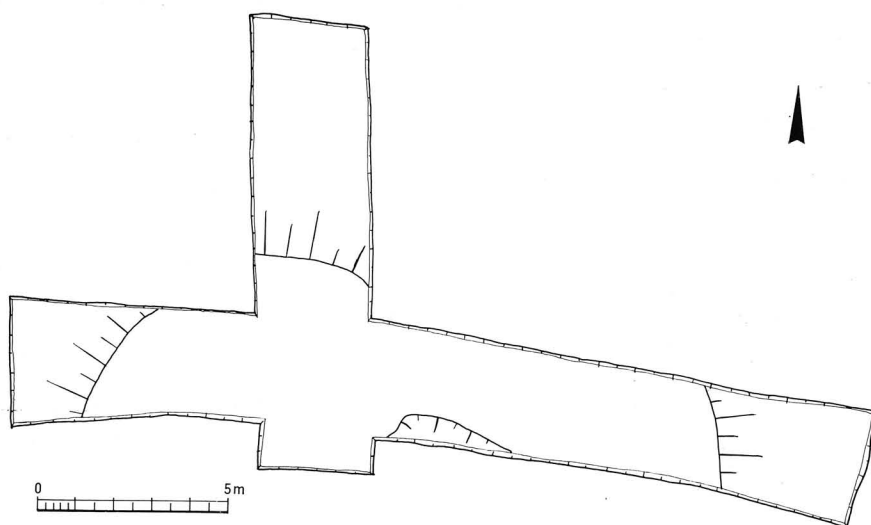
第35図 第13号地点遺構図（薄線は旧トレンチ）

以上、今回の調査の結果得られた事実と、前回調査の所見を合わせると、円筒埴輪列は東に進むにつれて遺存度が悪く、間隔も不揃いであるが、北側に円心を置く緩いカーブを描いて並ぶことから、前回の所見と異なり、埴輪列の北側に古墳の本体があった可能性が高いようである。ただ、今回調査地以北については水田地帯が広がっており、約1.5mほども地盤面が低くなっている。したがって、すでに大幅に削平されていることは明らかであると共に、私有地のために調査を拡張することはできず、当初目的とした規模の確認には至らなかった。

V-2 第14号地点

調査地は第15号地点古墳（「奈良山」1973年）の西南方50mのところであり、丘陵端部近くの西側傾斜面の一部が墳丘状に盛り上っているところから小形の古墳の存在が予想された。現状は竹林と茶畑となっているが、道路と土取りによって一部が削平され、東西にやや長い不整形円形を呈している。

調査は東西20m、南北10mの墳丘状をなす範囲に幅3mのトレンチを東西および南北方向にそれぞれ設けた。その結果、厚さ約20cmの表土下からは黄褐色の粘質土の地山があらわれ、トレンチ内全面に広がっていることを確認し、さらにこの地山面が現在の地形に従って北側はやや急傾斜面となって丘陵裾まで続く形勢を示し、東西側もほぼ同様の状況にあった。南側についても道路との間に土取りによる窪地があり、これに続いていた。トレンチ内からの遺物はまったくなく、周囲からの遺物もなかった。以上のことから一見墳丘状を呈するこの地形は丘陵西北面に派生したテラス状の突出部であり、竹林造成などによって改変されて現状の形になったものと考えられる。



第36図 第14号地点トレンチ配置図